

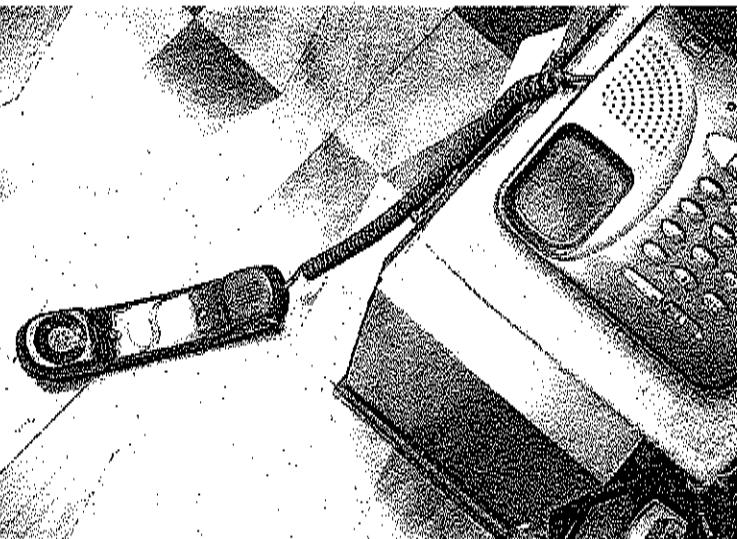
9/14 朝

80代 2人だから大丈夫と

2人孤死

上

高齢の木曜日だった。大阪府守口市の葬儀の週間には、葬儀の準備が競り合っている。葬送(30)は、それをいいげに置く。せいで、まだ施設がない母(当時88)の娘だった。中止された葬儀が開かれた。おじいちゃんにあらゆる配慮がなされた。



男性の母は電話機のそばで亡くなっていた。受話器は外れていた。その当時の状況を取材時に再現してもらった
=いずれも2020年8月30日、大阪府守口市、茶井祐輝撮影

誰にもみとめられずに亡くなり、時がたってから見つかる孤死死は、一人暮らし世帯の問題として挙えられてきた。

しかし事件に巻き込まれた可能性が低いとみられる遺体を取り扱う東京、大阪、兵庫の監査医の事務所などによると、同居者がいるのに室内で遺体が放置され、発見が遅れる事例が近年、散見されるようになった。同居者が認知症や重い障害、寝たきり状態の場合に目立つという。

こうしたケースで死後4日以上たって遺体が見つかったのは東京23区で152人(19年)で、累計を始めた03年の68人から倍以上に増えた。大阪市内では毎年30人前後で17~20年に計110人。神戸市(北区と西区を除く)では18年までの15年間で計152人(死後24時間以上経過)。大

支援漏れる2人世帯

阪府監査医事務所の担当者は「2人とも孤死死する一步手前の状態で、リスクが高い」とする。

佛教大社会福祉学部の新井順友准教授(老人福祉論)は背景について、「地域から孤立する家庭が増えてきたためでは」と指摘。支援を担う行政が早期に介入すればリスクを把握できるが、「孤死世帯以外に手が回らず、2人世帯は支援の枠から漏れてしまふ傾向にある」とする。

「特効薬」はなく、住民間でコミュニケーションを図る機会を意図的につくることが重要。周りが微妙な変化に気づけば、支援につなげることができる」(野崎智也、山本逸生)

少子高齢化の中、各地で起きていく「2人孤死」。その状況を3回にわたり報告する。

母の遺体 傍らには外れた受話器

男達は「母の状況をつかんだ

した。なぜ死んだ

のか

のかも知れない。母も、そ

れ以上何も言わなかった。

父は聲音を吐くべからず

で毎日食事を開いた

弟は大学進学と同時に西

東へ。母は20歳の時に社

事の都合で大阪市内に移

居。母は高齢となつた

頃だけが残った。

2年ほど前から母は足

痺かなつた。父が復讐

ない事を入念にねだ

それが気がおひだりた母達

は、週末は家族で過ごすよ

うとした。

父は毎日ラジオ体操を

欠かさなかつた。父が復讐

しない事を入念にねだ

それが気がおひだりた母達

は、週末は家族で過ごすよ

うとした。

父は毎日ラジオ体操を

欠かさなかつた。父が復讐

しない事を入念にねだ